

20 年前、発達障害の概念がここまでの広がりを見せるとはだれが想像したであろうか。診察室や教室で「ちょっと気になる」子どもたちは、「障害」という括りのなかでクローズアップされ、その診断、治療、対応、制度の改正などについてさまざまな専門家たちが議論を重ねてきた。

普通学級に通う子どもたちの約 7% が発達障害のスペクトラムをもつ、という文部科学省の衝撃的な発表は話題となったが、発達障害という概念自体がスペクトラムであり正常か異常かの境界線は曖昧なものである。その境に「社会適応」というキーワードは重要であり、実際に社会で「適応」している発達障害のスペクトラムをもつ児（者）の数は想像をはるかに超え、そのなかには異彩を放つ大活躍をしている方々が大量いると推測される。

Average（平均）= normal（正常）と考えがちなのは日本人の習性なのかもしれないが、特性の偏りをもつ発達障害児（者）が集団の中で abnormal な存在ではなく、個の character として受容し、受容されながら社会の一員として安定して生活を送れるようにすることが発達障害医療の目標でありゴールといえよう。

本書を監修した宮尾益知氏は私の 20 年来の恩師であるが、小児神経科医として常に第一線で活躍し続け、その先見の明と抜群の診療センスは他に類をみない医師として定評がある。彼の後を追いつつ小

児神経科医として同じ道を歩んでいるが 20 年たった今でも、会うたびに新しい情報を教示して下さり、私にとってはいつまでもたっても追いつくことができない大きな存在である。

同じく監修者の橋本圭司氏は私の大学時代の同級生であり、成人の高次脳機能障害についての第一人者である。彼は小児の発達障害という概念にリハビリテーション医療からの新しい切り口として、多職種連携や成人までの連続した児者一貫支援、社会とのつながりについて強調している。

この二人が監修した本書が、これまで出版されてきた多くの発達障害に関する書籍とは全く別次元のものであることは言うまでもない。手に取ったものの「どこから読み進めるか」ということから悩んでしまうほど、執筆されている先生方は著名な方ばかり、多種多様な視点から書かれた内容はどれも知りたかったものばかりである。本書を片手に、今日からすぐに診療で使える内容が満載なのは、臨床医として長年多くの患児、家族を診てこられたお二人だからこそ、さすがの一言である。

本書は医師だけでなく、発達障害児（者）、家族の幸せを願うすべての職種の方々のまさにバイブルといえよう。

（B5 頁 280 2017 年 定価：4,500 円＋税 [ISBN978-4-260-02846-2] 医学書院刊）

News

「あなたに合う競技は」ウェブで診断、チーム検索も

日本財団パラサポセンター

日本財団パラリンピックサポートセンターは 4 月 19 日、障害の程度や好みなどに応じて利用者に適したパラスポーツを診断するウェブサイト「マイパラ！ Find My Parasport」（www.parasapo.tokyo/mypara/）を公開した。パラスポーツに関する情報へのアクセスをよくし、競技人口拡大を目指す。

競技診断のほか、住んでいる地域にあるチームも検索できる。

現在、サイトにはアーチェリーやウィルチェアラグビー、車いすカーリングなど 27 競技が掲載され

ている。登録チーム数は 246 件（4 月 18 日時点）。今後、それぞれ掲載数を増やす予定だ。チームからの掲載依頼なども受け付ける。

サイト公開に合わせ 19 日に都内で開かれたトークイベントには、スノーボード選手^{（ふうり）}の成田緑夢さんが登壇し、サイトについて「使い方がすごく簡単で、こういう競技の方が向いていたかな、と考えさせてくれる。今後、パラリンピックの規模や裾野が広がっていくのでは」と話した。

（福祉新聞・第 2809 号 2017 年 5 月 1 日）